福岡教育大学紀要，第42号，第5分冊，1—10（1993）

合唱表現における評価

岩　﨑　洋　一

（1992年9月10日　受理）

A Study on Evaluation of Chorus Expression

Yoichi Iwasaki

I　序

歌うということは，人間に直接結びついた行為であり，音楽は歌うことから始まったといわれている。そして，人の声は素朴で，柔和であり，使い方次第では人の心を打つ音楽の原点である。人間が集団あるいは社会を形成しはじめたとき，声を合わせて歌うことも始まったといわれている。

現在の社会や学校の中で，合唱は，吹奏楽やオーケストラ，軽音楽等と並んで位置づけられているが，歌うという人間の内面からの表出は，現代の感覚にどの様に受け入れられているであろうか。それは，華やかさのある吹奏楽と比べてみると，クラブ活動としての合唱は，もう一歩活力に乏しい状況がある。

ところで合唱活動の場を見渡してみると，社会教育として，職場，一般，おかあさん，少年少女といった組織があり，学校教育では，授業は勿論，小学校，中学校，高等学校，大学のクラブ活動が存在している。これらの活動は日々歌い合うことの喜びを求めて人々が集まり，合唱表現の可能性を追求しているのである。

これらの合唱活動では，何らかの形でその合唱表現の評価がなされるのが常であり，その多くは演奏会やコンクールといった発表の場を通してである。その発表の場としては，学校教育の場合，その対象になるコンクールとして，ＮＨＫ全国学校音楽コンクールや全日本合唱連盟のコンクール等がある。それらのコンクールでは，評価の結果として当然順位が付され発表されるのであるが，どの様な審査基準でもって評価されるのであろうか。その他，近身なコンクールとして，現在多くの中学校で校内合唱コンクールが学校行事の一環として位置づけられ，生徒の熱気がうずまく場となっている。そして，やはり順位が決められるのである。

そこで，この合唱表現がもたらす内容を，どの様な観点で評価するのか，ともすると評価する人の主観が先行するといわれる音楽領域の場合，具体的にどの様に定めているのであろうか。それは，コンクールの性格から自ずから，純粋に音楽表現のみの評価に終止する場合と，それぞれの合唱活動の目的から教育的な評価を加味する場合もあるであろう。

本研究は，社会教育，学校教育で行われているこれらの合唱コンクールに視点をあて，その評価がなされる審査項目と，それがどの様に児童・生徒の合唱表現とかかわりをもっているかを探るものである。なぜなら，それらの評価の観点は，即，指導の観点そのものに置きかえることができるのである。

II　音楽科における評価

学校教育における評価は，児童・生徒の状態を見定め，より望ましい学習ができるように示唆を与え，子どもを励ましていく教師の働きと考えられる。そして，教育がその目標に照らしてどの様に行われ，どの程度達成されたか，また，達成されなかった内容をどう解決してやればよいかを明確にする教育改善の方法でもある。

また，評価は，子ども側だけでなく，教授＝学習活動の成果を教師側から見て，その指導計画や指導法が適切であったか，そして，どの様に改善すればよいかといった視点も含まれるのである。

これまで音楽科の評価には，音楽のもつ特性，すなわち非言語的，非概念的な芸術をあつかうことから，次のような評価の困難性がいわれてきた[1]。

① 音楽は時間的芸術であり，現象的につぎつぎと消えていくため，手に取っての取り扱いができない。

② 組識的規格音を骨子的素材として形づくら

れた芸術であるため，茫洋として捉えにくく，評価の客観的具体的な基準・尺度が作られにくい。

③ 他の科学的諸文化と比べ，かなり非合理性をもつ。それ故，学習効果や成果を厳密に段階や点数で割り切って測定・判定することができにくい。

しかし，現実にはより客観性のある主観的評価でもって，学習者が意欲をもって学習を追求していけるような評価をしなければならないのである。

では，音楽の場合，どの様な評価内容があるのか，歌唱に限定して見てみよう。それは，呼吸，音色，発音，テンポ，拍子，リズム，音程，フレージング，ハーモニー，強弱，歌詞，楽曲の解釈等に関する要素の評価であり，表現の技能と表現の基礎となる音楽の識別・理解を含めて総合的に捉える必要があろう。

歌唱に関する評価の観点と具体的な視点は次の通りである[2]

① 音楽的感覚に関すること
拍（拍子），リズム，音高（旋律），フレーズ，速度，強弱，和音（和声），音色

② 音楽的知識・技能に関すること
姿勢，呼吸，発声，共鳴，口型，唱法，身体表現，曲の組み立て，楽譜上の記号の理解と応用，表現の工夫

③ 内面・心理面に関すること
興味関心，協調心，意欲，歌う喜び

ここで考えなければならないのは，あくまで，これまでの歌唱・合唱は様式からして，そのほとんどが17世紀から19世紀にかけての西洋音楽の理論に基づいているということである。このことは，発声に関しても，頭声，ベル・カント唱法といったヨーロッパ様式が主であり，テンポ，リズム，ハーモニー，フレージング，ダイナミックス等においても，一つの様式に帰属し支配されているのである。

そのことから，評価に関しては，評価するものと評価されるものとが，それらの暗黙の了解に基づいてなされているのが前提といえよう。

Ⅲ 合唱表現とその評価

合唱に関する評価については，合唱コンクールといわれる次の３つの対象を取り上げ，そこで行われている評価を洗うことにより，合唱指導の目標とその指導内容が浮き彫りにされてくると思われる。検討したコンクールは次の通りである。

① ＮＨＫ全国学校音楽コンクール

② 全日本合唱連盟合唱コンクール全国大会

③ 中学校における校内合唱コンクール

1 ＮＨＫ全国学校音楽コンクール

現在，このコンクールは，学校における合唱の底辺を広げると同時に，合唱活動を通して学校の豊かな音楽生活を育てるコンクールを目指してきたといえる。そして，その審査の主な点は，①最も望ましい音楽活動のあり方を示した学校を選び出すことであり，②演奏内容の技術面の表現・発声・アンサンブルの諸点を十分に吟味した上，全体を総括して評価し，③技術面だけでなく，児童・生徒の活動全体を総括的に見る。ということである。また，具体的な評価項目は次の通りである[3]

① 演奏内容の評価

② 児童・生徒の演奏態度，表現意欲にも目を向ける。

③ 楽曲の選択

④ 音楽表現の多様性を尊重

以上，ＮＨＫ側の審査に関する考えを見てきたが，演奏だけでなく，日常の学校生活に寄与する方向を示唆しているが，実際はどうであろうか。全国大会の審査講評から，合唱表現の具体的な評価内容を検討してみよう。

まず，作詞者，作曲者の意図した内容が，演奏を通してどの様に表現され，その表現された内容を講評者がどの様に吟味し，評価したか探ってみよう[4]

(1) 小学校課題曲「亜麻色の風の中へ」昭和62年度（第54回ＮＨＫ全国学校音楽コンクール）

① 作詞者（こわせ・たまみ）のメッセージ
・自然の素晴らしさを実感し，うたいあうこと。自然と人間の相関をうたう。
・詩の言葉は，音や響きに，そこに流れるものとの相乗に意味をもつ。美しいもの，素朴なもののイメージとして，詩全体として流れる空気を吸って欲しい。

② 作曲者（玉木宏樹）のメッセージ
・隠し味が随所にあり，弱拍から出ているところが多く，表現では，逆に弱拍を強調する方がより良くなる場合もある。言葉を大切に，弱拍を出す所を注意深く歌う。

以上が作詞者・作曲者が意図した内容である。次に，全国コンクール出場校の演奏に対する審査員からのメッセージを項目別にまとめてみよう。小学校については審査員９名の内容を整理した。その構成員は，作曲家３名，声楽家２名，合唱指揮者２名，音楽教育者２名である。

③ 審査員からのメッセージ

ⓐ 演奏技能

ア　発声
・明るい声がほしい。
・より豊かな響，言葉のリズムを自然に。
イ　言葉
・言葉を明瞭に，言葉のリズムを自然に。
・一人ひとりが「自分の言葉」で歌っていたか。
・アクセントのある音，強調したい音，語や文章そのものがもつ抑揚を大切に。
ウ　ハーモニー
・美しいハーモニーとバランスの良さ。
エ　指揮
・音楽性にあふれた指揮。
・もっと歌いやすい，声を引き出す棒の振り方。
・音楽を引き締める棒。
・精神の内面を限りない空間に向かって投影している。
オ　ピアノ伴奏
・歌を引き出し，合唱とともに音楽をつくっていく存在。
・指揮者と息の合った伴奏がほしい。
ⓑ　演奏内容
・堂々とした歌いぶり，豊かな音楽性。
・気持のよい，伸びやかな表現。
・いきいきとした歌いぶり。
・爽やかに歌う。
・ていねいに，じっくり歌い込んでいる。
・明るさにあふれた演奏。
・ゆうゆうと音楽の流れにのって歌う。
・わざとらしさがなくてよかった。
・音楽に動きがある。
・自然な音楽の流れ。
・音楽の色が単一色で少々あきっぽい美しさ。
ⓒ　選曲
・自分たちの合唱部にあった曲を選ぶこと。
ⓓ　表情
・自然な表情で。
・一斉に揃った口の開け方は不自然。
ⓔ　楽曲解釈
・五線の行間を読み取り想像する。
・曲には弱点があり，それを見つけ出して対処する。
ⓕ　オリジナリティー
・まねではない，土台からの音楽。
・独自の表現方法を身につけて出場。
(2)　中学校課題曲「トマトの夕焼けスープ」昭和62年度
①　作詞者（村田さち子）のメッセージ
・地球の表面から夕焼け色は気化してしまったが，その芯はまだ色を失ってはいない。
・たとえば，自分の好きな夕焼け空を想って，そこまで届くように思い切り大きな歌をとばして下さい。色々な自分を想像して，色々な歌を創造してみて下さい。
・ただ，自然の憂いを理解できるやさしさだけは，どうぞ失わないで歌を楽しんで下さい。
②　作曲者（青島広志）のメッセージ
・歌う時，別の自分になりきることが大切です。音色の変化や，ちょっときわどい表情のつけ方がポイントになります。
・縦に揃うところ，ずれるところ，強いところ，弱いところ，ルーズなところ，正確なところ，拍子や調性の変化などを意識して表現して下さい。ピアノパートをカッコ良く弾いて下さい。

次に審査の講評を見てみよう。審査員の構成は，作曲家１名，声楽家３名，合唱指揮者２名，評論家１名，音楽教育者１名の計８名である。

③　審査員からのメッセージ
ⓐ　演奏技能
ア　発声
・男性が良く歌っている。男声パートの充実。おどろくべき声の成熟度。男子の変声期を過ぎたばかりの声作りの難しさ。
・呼吸法の柔軟なフォーム，柔らかい発声が必要。
・ハミングの技術をしっかりと。
・声と言葉の結びつきがモノをいう。
イ　言葉
・言葉の意味を歌ってほしい。語感を捉え，それがどの様に旋律と結びついているか。
・日本語がフレーズとして発語され，自然な語感になるように。
・アーフタクトの言葉がハッキリしない。
・鼻濁音をしっかり。
ウ　ハーモニー
・ハーモニーの安定，女声，男声のバランス。
エ　テンポ
・テンポの取り方とリズムによって全体の流れをそこねる。
ⓑ　演奏内容
・音楽に自発性をもって。
・活力にあふれた表現。
・緻密なアンサンブルをきかせる。
・伸びやかな音楽，豊かなフレージング。
・完成度の高い，説得力のある表現。

・しなやかなフレーズがほしい。
・劇的展開と抒情的展開の対照をクッキリと。

ⓒ 選曲
・自分の殻に合った作品を選ぶこと。
・合唱団の魅力を十分に発揮できる選曲。
・長い練習を通して，全身でぶつかっていく子どもたちの感性に十分応えられる曲。
・大柄な曲を選び過ぎ，声の完成度を無視した選曲。

ⓓ オリジナリティー
・指導者の音楽性，指導力，それに対して歌う側の共感度，自発性，聴き手に伝えるアピール度。
・全体の中で自他共に生かし得る能力を持った「個」を育てる。「全体を生かせる個」「個を生かせる全体」。

(3) 高等学校課題曲「巨木のうた」昭和62年度

① 作詞者（木島始）のメッセージ
・樹齢千年も二千年もの大木を，町の真中に，今まっすぐに植えこんで，みんなで見あげるようにしよう。不可能を歌の中で可能にしよう。
・そんな大木にどんな落書きを書いてみるか，全体のイメージを自分でつくってみよう。

② 作曲者（林光）のメッセージ
・まず歌ってみよう，言葉と音が自然に一致するように。
・全体の感じが見えてきたら，詩を読もう，くりかえし，何度でも。
・詩が感じられたら，感じたことを全部歌って表そうとするな。なぜなら，作曲という仕事が，すでに詩を半ば「あらわし」てしまっているのだ。
・「悲しい」ところで，いかにも悲しそうな表情や息づかいをするな。その一歩手前で踏みとどまり，「悲しさ」はお腹の中に隠せ，だが忘れるな。
・ピアノは，伴奏というより共演者だ。
・ここがポイントという考え方をやめて，全部がポイントであり，またポイントでない。「木も森もよく見える」というのがいい。
・「オトナの声」をめざすな。今の君たちの声が一番すばらしい。普段のコトバ(日本語)を，そのまま発音することを考えろ。

この作曲者の林光のメッセージは，音楽する姿勢，高校生という年代のもつ良さ，合唱アンサンブルの表現手法を端的に言い表わしている。

では審査員の講評を整理してみよう。審査員は作曲家4名，声楽家3名，合唱指揮者1名，評論家2名の計10名である。

③ 審査員からのメッセージ

ⓐ 演奏技能

ア 発声
・声に深さがある。それが音楽的表現に豊かさをもたらしている。
・レガート唱法を会得してほしい。
・アルトのパートが安定して，音楽を支えている。
・各パートの声の質のバランスが良い。
・声の色あいの作り方，fの音色に気をつけて。
・「う」「い」がふくらみのない音色になりやすい。

イ 言葉
・詩の読み取り方。
・言葉のリズムの生かし方。

ウ アンサンブル
・男声が響きのある声で女声を低音で支え，アンサンブルに厚みあり。
・ハーモニーに時々くもりが見られる。
・アインザッツの合わせを大切に。
・音楽の流れがきれぎれになる。

ⓑ 演奏内容
・情緒豊かで，デリケートさあり。
・音楽的な流麗さ，感動できる演奏。
・さわやかなおおらかさ，温かさが伝わる。
・単に音符を辿るのではなく，音楽的構成と，音楽的効果をわきまえて。
・音楽に生気を出す，燃焼度がほしい。
・音楽的造形を自然な流れの中で処理する。
・素直で豊かな音楽的構成が美しい。
・音楽が強く聴衆にうったえる力あり，説得力のある音楽の表出。
・輝くばかりのおおらかな音楽の香りが標っている。
・ハギレよく，上品で音楽に変化がある。

ⓒ 選曲
・難度の高い意欲的な作品に取り組んだ。
・合唱部のもっている個性，可能性を生かして選ぶ。
・音楽を楽しむという選曲の仕方。

ⓓ オリジナリティー
・技術の優劣の差は少なくなった。本来の音楽の感受性，表現法などが重要な要素となる。
・かけがえのない個性と音楽的主張がある。

この様に，ＮＨＫ全国学校音楽コンクールの小学校，中学校，高等学校のそれぞれのメッセージが盛り込まれた評価内容を見てきた。ここで感じるのは，小学校から高等学校までの子どもたちの発達に沿って評価の視点が変わってきていることである。それは各項目に現れており，全国コンクールのみでなく，地方コンクール[5]の講評を交えて見ていくと，演奏技能面の発声では，小学生に明るい声の透明度が要求されており，無理に咽を深くして大人っぽい表情をつけたり，逆に浅く薄い声を子どもらしい声としないような評がみえる。そして中学校になると，以前よりも混声三部や混声四部を歌う学校が増えてきており，自ずから変声期前後の男子の発声に注意が払われているようだ。それとともに，中学生とは思えない声が増えたという評もあり，成長のはやさが中学校までおりてきている証しでもあろう。高等学校までいくと，基礎的な発声ではなく，音楽表現に対応した音色や唱法に視点がいっているのである。このことは，発声に関する内容が，小学校，中学校に比べて多いことから，純粋に合唱音楽を追求していってもらいたいという審査員の想いが，発声の評に現れてきているといえよう。

次に，言葉を見てみると，小学校では，「もっと歌詞を丁寧に」とか，「助詞，接続詞のたぐいを強調しないように」といった初歩的な指摘がある。それが中学校では，「日本語の語感を捉え，自然なフレーズで」という様に，発語に注意が多く払われるようになり，高等学校では，「言葉を単語ではなく，文章で捉える」といった，詩を大きく見きわめ吟味する方向にいっている。更に，演奏内容においては，中学校から高等学校にかけて，音楽の燃焼度や構築性など，音楽性の追究に関する評が増えてくるのである。

ここで視点を教師側に向けると，小学校では教師の専門性の評価として，指揮やピアノ伴奏についても記述が見られる。とりわけ，選曲については，教師の選定によるところが多く，合唱クラブの実態に合った曲が望まれるにもかかわらず，力に余る曲を選んでしまう傾向が見られる。

その他，オリジナリティーの問題が提示されており，新たな合唱作品の出会いと，演奏に対する自発性を求める声が大きい。

2　全日本合唱連盟合唱コンクール全国大会

このコンクールは，中学校，高等学校，大学，職場，一般の部門にわかれており，昨年で44回目の全国大会を数える。ただし，中学校は昨年が初めての全国大会であった。

ここで，この連盟が審査員を選ぶ際の考え方としては，審査を平均化するため，なるべく色々の分野の人から選ぶということである。それだけに，その審査員の専門性から評価の視点が異なってくることが考えられ，そのことは一つの価値観に捉われることなく好ましいことである。

その審査システムの一つの方法として，ドイツの合唱指揮者マルティン・ベアマンは次のように提案している[6]。

① 音程
- 一本の線として，あるいは集合体として，鳴り響いているか。
- 音程の安定度，音程は保たれているか。
- ハーモニーの理解度，合唱の様式と音程が調和されて正しく響いているか，あるいは単に機械的な歌い方か。

② リズム
- 一本の線を保っているか。
- 垂直に一本にまとまっているか。
- 音楽的に生きているか。

③ 音声
- 発声訓練の質。
- 合唱の質（調和，美，個性）。

④ 解釈
- 作品，作曲家，スタイルがふさわしいか。
- 生き生きしているか，興味深いか，個性的か。

これも明確で有効な評価項目とその内容である。

次に審査規準を審査員それぞれのコメントより拾ってみよう[7]。

(1) 審査員による審査基準
- 演奏に主張と説得力を持つこと，いかに表面上整っていても何も訴えるもののない演奏や，必要以上に誇張された表現には耐えられない。その裏付けとして，「透明度の深い音色」「音楽と詩の完全な一致」「曲に適応したリズム感」等，基本的なものが必要。（合唱指揮者）
- 選曲について，選択曲と自由曲とのバランスが難かしい。つまり，対照的であればメリハリがつくが，逆につきすぎると統一に欠ける。（作曲家）
- 「心にひびく合唱」を，歌う曲に対して，熱い共感と一人ひとりの感動が，指揮者の解釈のもとに，一つの「音楽」となってステージから聴衆へのメッセージとならなければならない。ただ精度のみを競うような合唱だったら良い評価をしない。（声楽家）
- 対象となる演奏から技巧という装いにのせ

て伝えられる感動がいかに大きく聴き手の魂を揺り動かすか，振幅の大きさによって決定される。評価の3つのポイントは，「その演奏が何を意図しているのか」「それが，どの程度に実現しているのか」「その内容が今の時点でいかなる価値をもつか」である。(評論家)

ここで，昨年第1回目コンクールを催した中学校の全国大会の講評を見てみよう[8]

(2) 中学校部門全国大会の講評

講評は，審査員の中から，作曲家1名，指揮者1名，声楽家1名，音楽教育者1名の4名であたっている。

ⓐ 演奏技能

ア 発声

- 混声の男子の声が非常に練れている。
- 様式により，ノンビブラートの発声が要求される。
- *f*で声が硬く金属的になると，伸びやかさ，柔らかさがうまく表現できない。
- 曲に対して声に余力がない。

イ 言葉

- 日本語の発音を強調しすぎて，わざとらしく聞こえてしまう。
- 気持がこもっていないこと，言葉が浮いてしまう。
- 鼻濁音が徹底されていない。
- 「ウ」の発声が，ドイツ語のウムラウトみたいになる団体が多い。

ⓑ 演奏内容

- 音楽に良い意味での圧力がある。
- 曲の奥行きを十分に捉え切っていない。
- 繊細なところを十分に捉え切っていない。
- 大きな声で勝負しない方が良い，*f*が美しさの限界を越えてしまう。
- 強弱の幅が狭いと印象が弱い。
- 丁寧な仕上げだが，音楽をもっと前へもっていってほしい。
- 音楽に求心力がほしい。
- 歌と音のもつ感情のヒダを十分に表出。
- Pの緊張感がほしい。
- 勢いで歌うのではなく，ハーモニーが決まった時のゾクゾクするような快感，内容への共感を歌ってほしい。
- 音楽に色彩感がほしい。

(3) 高等学校部門全国大会の講評

この講評者は，作曲家1名，評論家2名である。

ⓐ 演奏技能

ア 発声

- 柔らかい音質で，男声と女声が良くとけ合っている。
- 音の推移が粗く，音域によって声の質が変わる。

イ 言葉

- 言葉のディクション，アーティキュレーションの処理を的確に。
- リリカルな詩情の表出，言葉のリアリティがもっとほしい。

ⓑ 演奏内容

- 音楽をやみくもに声高に叫ぶという方向の自由曲が多すぎる。音楽にはもの静かな語りもある。
- スイングするしゃれた感じがきまじめに捉えられていて，逆にそのへんをくずそうとしてサマにならない。
- 表現が平坂なため，全体的な構成感が出てこない。色と構成感に変化を。
- 譜面の奥，次の次元の音楽が不足している。付加価値の要素がない。
- テンションの構成の仕方，弛緩の作り方，メロディーの浮かばせ方，対位的な施律とのバランス等，構造的に把握を。
- 音楽がもたれている，もっと楽しく。
- 音楽の緊張から弛緩する時に表現が不足してしまい，音楽が一方通行になる。
- 音楽が上すべりになり，リアリティに欠く。もっと深くえぐって構築すること。
- 不協和から協和状態にいくニュアンス，非和声音と和声音の推移の理解を。

ⓒ 指揮

- ポリフォニー作品を拍節的なリズムで振ってしまっている人が多い。これはポリフォニックな線の音楽を非常に疎外している。
- 動作はとても小さいが，ポイントをきちんと押えていて，合唱団に自発的なものを促している。

これらは全国大会の講評であるが，これから感じるのは，演奏技能については，基礎的な技能の上に立って音色の変化にまで及んでおり，音楽構造の絡まりと表現の一体化が望まれている。また，言葉の処理では，わざとらしい表現をさけ，自然で美しい日本語の語感を追求する姿がある。

ところで，講評の中で演奏内容に関する記述が多くの割り合いを占めているのは，特に高等学校部門では講評者が作曲家，評論家のせいもあろうが，評価としては，まず合唱表現全体がかもし出す音楽を直接的に感受し，直観的に捉えるからであり，その後，全体の味わいを分析的に評価する

からであろう。あくまでも全体があっての部分である。

も全体があっての部分である。

その全体を捉えた評として，音楽として表現された内容を，多彩な形容詞を含んだ言葉で表現されており，この全体を包含した言葉が，この演奏のいわんとしたところを言いあてているといえよう。その中には子どもたちが「歌わされているのではなく，自発性をもって歌っているか」とか，「心底感動して歌っといるか」「心の深いところで音楽を語っているか」，それが「心に響いてくる演奏になっているか」といった，本来合唱音楽が追求してやまない真の活動の姿が，フィルターにかけられて見えてくるのである。

その他，教師側の指揮についての批評があり，いつも子どもたちの表現を通した音の評価が多いなか，その土台となっている教える側の姿勢が問い直されているといえよう。

3　中学校校内合唱コンクール

このコンクールは，近年多くの中学校で学校行事の一環として位置づけられ，音楽を協同で創り上げることと同時に，学校運営とかかわり，学級作りの大きな要素をともなっている。

今回，福岡県内，北九州，宗像，福岡，筑後地区の中学校17校にアンケート調査をお願いし，校内合唱コンクールの審査項目をまとめたものである。

この校内合唱コンクールの目的，ねらいは，どの中学校においても次の様な内容で一致している。

① 合唱を取り組むことにより，クラスのかかわりを深め，協調性の育成となる。

② 音楽する心，豊かな情操，感性を育てる。

③ 学校教育の中に合唱を通して文化を育てる。

この様な目的を設定した校内合唱コンクールは，このねらいに沿ってどの様な審査項目があり，その評価の観点はどの様な内容になっているのか，アンケートにより見てみよう。

表1　評価項目とその内容

項目	内　　容	学校数
発声	●声が良く出ているか。	13
	・大きな声で歌っているか。	
	・おもいっきり歌っているか。	
	・てれくさがらず歌っているか。	
	●美しい声で歌っているか。	8
	・声が良く響いていたか。	
	・美しい音色を出すように工夫されていたか。	
言葉	●言葉がはっきりしていたか。	4
	●歌詞の内容を考えて歌っていたか。	3
	・ふさわしい表現ができていたか。	
	・言葉のニュアンスが表現できているか。	
ハーモニー	●各パートのバランス，男声，女声のバランスが取れているか。	5
	●正しい音程で歌っているか。	10
	●ハーモニーの美しさが出て，調和しているか。	8
表現	●速さが適切か。	3
	●正しいリズムで歌っているか。	3
	●表現にあったリズム感が出ているか。	1
	●強弱をつけて工夫しているか。	3
	●息が合っているか。	1
	●歌の入りや終りがきちんとできたか。	1
	●まとまりのある演奏ができているか。	3
	●音を伸ばしたり，短く切ったり，表現の工夫をしていたか。	1
	●曲の感じをうまく表現しているか。	6
	・曲の表情がついているか。	
	・曲の味わいが出ているか。	
演奏内容	●音楽に高まりがあり，生命感にあふれているか。	2
	●意欲をもって気持よく歌っているか。	2
	●感動をもって歌っているか。	2
	●何をうったえたいのか。	5
	・人の心にうったえたか。	
	・主張があったか。	
	・いかにドラマが作られていたか。	
	●気持を一つにして歌っているか。	6
	・指揮・ピアノ・合唱が一体になっているか。	
指揮	●指揮者は，指揮がきちんとできているか。	3
	・拍子に合った指揮ができているか。	
	●指揮者と合唱との息が合っているか。	10
	・指揮をよく見て歌っているか。	
	・指揮者に合わせようと努力しているか。	
	・指揮者の示す拍子に合っているか。	
	・よそ見したり，下を向いてばか	

	りの人はいないか。 ・互いに聞き合いながら歌っているか。	
ピアノ	●歌とのバランスが良いか。 ●曲の出だしや曲の歌い終りに，伴奏がきれいに揃っているか。	3 1
選曲	●クラスのテーマ，イメージに合っているか。	2
態度	●ステージ上のマナーが守られているか。 ・顔が上がっているか。 ・動作が揃っているか。 ・入場の際に，静かに並ぶことができたか。 ●良い姿勢で歌っているか。 ●演奏に対して真面目に取り組んでいるか。 ●移動中および待機中の態度。	13 1 2 3

以上が評価の観点と内容である。この他，多くの学校で取り上げているものとして，各学級からのメッセージを披露した後演奏に入る方法である。その内容は，①この曲を取り上げた理由，②練習してきた過程，③何をうったえたいか，等である。このことにより，各学級がこれまで協力して創りあげてきた合唱の意図と，合唱へかける意気込みが会場へ伝わるとともに，審査員にとっては，その学級の状況を把握し審査する情報源となるのである。

それでは，アンケートの評価項目とその内容を検討してみよう。

〈発声〉においては，大きな声でおもいきって歌っていることが一番の評価観点である。一般的に授業では大きな声で歌うことが多く見られず，この年代特有の照れ臭さとか，恥かしいといった心理的な面から声を出すことに抵抗を感じているのも事実である。しかし，このコンクールを通して集団で歌い合うことにより，心が開放され，様々な学級の音楽美への追求に触れた時，より美しい響きに関心がむくことも事実である。

〈言葉〉〈ハーモニー〉に関しては，合唱音楽がもつ構造的要素をどこまで再現できるかにかかっている。正しい音程が美しいハーモニーを創り，歌詞のニュアンスをどこまで旋律に乗せて表現できるか，このコンクールでは音楽解釈を含め評価観点のレヴェル設定に苦労するところである。

〈表現〉では，基本的な楽譜の読み取りと，曲想への工夫が位置づけられており，教科としての授業の取り組みの成果が問われているといえよう。

〈演奏内容〉は，このコンクールの重要な主眼であり，学級が一丸となって目的に向かって積み上げていった結果を評価するのである。すなわち，演奏する姿から意欲を感じ，音を通して伝わるメッセージから，感動の度合いをおしはかるのである。

〈指揮〉〈ピアノ〉については，多くの学校が審査項目に入れておらず，各学級の構成員の実態が違うための処置と思われる。この中で，合唱活動が盛んな学校では，生徒の指揮に対し，最優秀指揮者賞を出すところもある。

〈選曲〉についても，余程学級の合唱への凝集度が高くない限り，評価しにくく，審査項目としては一般的でないようである。

〈態度〉に関する項目は，音楽表現技能とともに生活指導の面も加味され，評価の大きなウエイトを占めている。この基本には，集団の中で自分がどうすべきかといった，規律・規範を含めた集団と個の関係があり，合唱形態がもつ必然性を通して定着が図られているといえよう。

この他，音楽担当教師が授業を通して，「協力してコンクールを目指すことができたか」といった練習過程を評価に加える学校や，各学年の評価観点を，1年生は声，2年生は音程・ハーモニー，3年生は曲想表現，と変えて提示しているところもある。

ところで，校内合唱コンクールがこれ程まで推進される背景には，合唱が個別ではなく，より集団の力量に依拠せざるを得ない形態であるが故に，その成果が，学級や全校集団が共有できる財産となり得るからであろう。そして，コンクールという競争的状況は，校内合唱コンクールを見る限り，学級集団相互の協応が多くなり，互いに助長的に依存していっているようである。わけても，合唱活動への動機づけは，合唱そのものへの興味・関心だけでなく，競争相手としての他の学級や学年の存在によって強められているのである。

更には，このコンクールの評価は，技能の向上は勿論，学級で心を触れ合わせ，自発性をもって音楽表現をしていこうとする情意的な成長が大きな成果として残っていくのである。それ故，「ある先生は，表現としての君達の努力を買い，ある先生は，素晴らしいハーモニーを作った，その音楽を底深く追求していった努力を買い，ある先生は，

雑でも，その意欲を買い，色々な観点から評価してみると，もう結論が出ないのです。[9]」という文章に集約される評価の基準は，現在の校内合唱コンクールがもっている教育的価値と，教科としての音楽の意味を充分に言い当てている。

Ⅳ　評価内容のもつ意味

合唱をするということは，そこに種々の目的が込められており，それが学校教育であれ社会教育であれ，自ずから評価が伴ってくる。そして，その評価された内容をどう受け止めるかによって，次への活動が具体的に修正され，音楽表現へ転化されていくのである。

これまでコンクールでの評価を探ってきたが，ここでは，評価が合唱表現へ与える意味を要約してみよう。

① 合唱表現では，作品のもっている姿を追究し，それに近づく努力をするために，音に対する磨かれた感性と，精神的行為の持続が必要となる。そのため，その行為が一つの団体，一つの学級に留まってひとりよがりにならないために，客観的な評価が必要となる。

② コンクールには，結果がつきものであり，その評価内容は，指導する側のこれまで指導してきたことに対する評価となる。すなわち，その内容を見据えることにより，自分達の演奏を確かめる資料となる。

③ 校内合唱コンクールは，結果に対する順位だけでなく，評価されることを通して，同じ仲間の演奏を真剣に聴き合い，より高いものを創造しようとする意欲を養うことにもなる。

④ 評価はある意味で教育的な役割を果たす。それは，歌う側と教える側が一体となって合唱表現に対して一つの規範を見つけ出していけることと，良い演奏のための手がかりが体系的に示される。

これら合唱表現に対する評価活動は，その評価内容を受け取る側の操作でその価値が変ってくる。そのため，これらの評価を裏がえしとして指導面に活用し，より良い合唱活動を可能にしていくための技術や感性をみがいていかなければならない。教える側が日ごろから求めてやまない音楽内容の追求は，詩人と作曲家による紙上のメッセージに「いのち」をいかに与えていくかであり，楽譜にある，旋律やリズム，記号をその通り歌わせることが目標ではなく，そのように歌いたくなる気持を起こさせることである。そして，その気持を共感し合いながら，どの様に曲を創り上げていくかを共に考え，歌う側の表現力を高めていくための具体的な提示とその指導が望まれるのである。そのために活用される評価内容は，細分化された要素においての評価ではなく，あくまで全体を俯瞰した評価から要求に応じて抽出すべきである。

Ⅴ　結び

合唱表現における評価をそれぞれの視点から見てきたが，これらの評価は，次の活動への動機づけと発展とにつながり，教わる側にとっては，音楽的未成熟な部分を判断するきっかけとなるのである。そこで，子どもたちが変容する姿を見せるためにも，常にその評価内容を実践に反映させることであり，しいては，音楽の授業にも反映できる評価とその捉え方であってほしいと願うのである。

この評価に含まれる内容は，音楽の美的判断とともに教育評価のプロセスであり，音楽的感動を生み出す表現法，例えば，音色，発音，強弱，声部の役割などの面から，多様な表現方法を工夫し，音楽的バランスの中から生まれてくる美しさを追求していってもらいたいのである。更に，小学生，中学生，高校生には，その年代の歌を歌うことを充実させ，教える側は，一人ひとりの子どもから“歌う喜び”を引き出し，仲間とともに息づかいを感じる合唱を展開していってもらいたいのである。

注

〔1〕　高山清司「音楽科教育概論」ドレミ楽譜　昭和52年　P.237～238

〔2〕　文部省「学習指導の改善」の考えをもとに作成した。教育出版　昭和62年　P.133

〔3〕　ＮＨＫ全国学校音楽コンクールの審査にあたって，共通認識のためのＮＨＫ側資料による。

〔4〕　小学校・中学校・高等学校それぞれの課願曲の作詞者，作曲者からのメッセージは，それぞれ，「教育音楽〈小学版〉」「教育音楽〈中学高校版〉」昭和62年６月号による。また，全国コンクールの審査員からの講評は，それぞれ「教育音楽〈小学版〉」「教育音楽〈中学高校版〉」昭和63年１月号による。また，昭和62年度のコンクールに視点をあてたのは，この年のコンクールに関する資料が最近のコンクー

ルより多かったためである。

〔5〕 ＮＨＫ全国音楽コンクール地方コンクールの評については，「教育音楽〈小学版〉」「教育音楽〈中学高校版〉」昭和63年12月号を参考にした。

〔6〕 「ハーモニー第78号」全日本合唱連盟 平成３年10月 Ｐ.16～18

〔7〕 「ハーモニー第58号」昭和61年10月，「ハーモニー第66号」昭和63年10月による。

〔8〕 「ハーモニー第78号」平成４年１月

〔9〕 若松啓三「全員が参加できる行事と合唱をめざして」季刊音楽教育研究 №24 音楽之友社 Ｐ.18